

発想変え、市場拡大に挑む

私は地場産業が好きだ。出張や旅で訪れた地域に根付く地場産業を可能な限り自らの目と手で触れるようにしている。兵庫県には実に多様な地場産業がある。五国と言われるがゆえに、食料品から繊維製品・化学・雑貨・機械・工業・窯業等、幅広い地場産業がみられるのが特徴だ。ゆえに「兵庫県の地場産業といえば？」と尋ねると、明確な統一した回答を得られにくいともいわれるが、こうした多様性こそ、兵庫県の強みであろう。

ところで、先日、淡路島を訪れた。淡路島は瓦の一大産地である。兵庫県の淡路瓦、愛知県の三州瓦、島根県の石州瓦は瓦の日本三大産地として知られており、この三つの地域で生産シェアは80%を超える。瓦がいつどのように生まれたかは定かではないが、今から3千年前には既にヨーロッパや中国で瓦を葺く文化は根付いていたという。人々の暮らしを守るため、壊れにくく雨風や熱から家屋を守る屋根が追求された。土をかたちづけて焼きしめる焼き物は人類最大の発明のひとつともいわれている。

淡路瓦は銀色に輝くいぶし瓦の生産で全国一を誇る。瓦づくりの

淡路瓦の産地



瓦割り体験に挑戦する。瓦文化に親しむを持つ機会が大切だ。南あわじ市(筆者提供)

山下紗矢佳

武庫川女子大学経営学部准教授

要となる上質な粘土質の土が産出されたことや、淡路の気候・風土が瓦の成形・焼きに適していることなどが、地場産業となりえたゆえんである。

しかし、瓦業界を巡る環境は実に厳しいものがある。屋根等に用いられる粘土瓦の出荷推移をみると、1980年をピークに縮小している。2023年の出荷額は約276億円とピーク時と比較すると9割減である。同様に出荷数についても85%減だ。

その要因は消費者ニーズの多様化や瓦以外の新しい屋根材の普及がある。また、阪神・淡路大震災以降、「瓦は地震に弱い」という誤ったイメージが定着したことも要因と指摘されている。

そんな厳しい環境下で、ユニークな取り組みをしている窯元を淡

路島でみつけた。工場の一角に「瓦割り体験道場」を開設している。興味本位で気軽に訪れた。すると、驚きの連続である。道場破りの演出から、道着等の衣装の用意、写真・動画撮影、認定書授与と充実したサービスが用意されている。なかでも驚いたのは、用意されている瓦である。瓦は本来、耐火・耐圧といった性能が求められるため、「強い瓦」を目指すのが一般的な考えである。しかし、道場には「割れやすい瓦」が用意されていた(もちろん割れにくい瓦も)。子どもや力の弱い方でも誰でも楽しめるよう工夫がなされている。

本来、瓦は新築・リフォームの屋根材市場において、新製品の投入等で販売を伸ばそうとするのが通常の戦略である。しかし、「瓦割り体験道場」では狙う市場をガラッと変更することで、瓦の消費拡大に貢献するとともに、瓦文化に親しむを持つ機会を顧客に提供している。瓦割りの際、目の前に積まれた瓦を前に緊張が走った。窯元の経営者も「瓦割り体験道場」を開設する際は同じ気持ちだったかもしれない。この体験を通じて、新しいことに挑戦する企業家精神に触れた気がする。

経済コメンテーター

4人の識者に交代で寄稿してもらいます。



やました・さやか 武庫川女子大学経営学部准教授。兵庫県立大学大学院経営学研究科博士課程修了。博士(経営学)。専門は中小企業、地域振興。近年は中小企業におけるダイバーシティ・採用力向上を研究テーマとする。